

『セントラルステーション』

2016年09月05日

ブラジル映画『セントラルステーション』をテレビで観た。この映画を観るようと、サンパウロ福音教会に宣教師として派遣された小井沼國光師から、勧められて、映画館に行って観た。1998年制作され、ブラジル映画では、初めてベルリン映画祭金熊賞を受賞した名画である。十数年前に観たのだが、今回、ブラジル人の人情と風景を懐かしく思った。

筋書きは下記の通りである。教師をしていた独身女性が、仕事を辞めた後、生活のためにリオデジャネイロのセントラルステーション前で代書屋をしている。綺麗とは言えない初老のドーラという女性が主人公である。字の書けない人のために手紙の代筆をして小銭を稼いでいるが、決して良心的ではない。費用を受け取って投函を依頼されても、勝手に手紙を破いて破棄することもするような仕事ぶりである。

ある日、母親と少年が来た。少年の写真も同封し、夫に会いたいという手紙を依頼された。ところが、目の前で母親がバスにひかれて亡くなり、ジョズエという名の9歳の少年は一人ぼっちになる。ドーラはジョズエのことが気になる。そこへ、米国やヨーロッパの金持ちに養子に送る話が持ちかけられ、2,000ドルの大金でジョズエを売り渡す。友人から、それは、臓器販売を目的とした人身売買だと告げられ、彼をやっとのことで取り戻す。

ジョズエは父親に会いに行くと言うので、バス停まで見送る。ドーラは一人では無理と思い、バスに飛び乗る。そこから、父親探しの二人の旅が始まる。ブラジルの長距離バスは大きくて乗り心地はよく、赤い大地を猛スピードで走る。ドーラはバスの中でぶどう酒をラッパ飲みするような女性で、二人の仲に信頼関係はなく、いつもギクシャクとケンカばかりしている。途中、ドーラは一人で行かせようとバスを降りるが、ジョズエもバスに乗らず、また、二人の旅は続く。お金を無くした二人はトラックでヒッチハイクをする。親切な運転手で、万引きした二人をかばってくれる。親切で、逞しい運転手にドーラは女心を揺さぶれ、言い寄ろうとする。察知した運転手は逃げ去る。

無銭のドーラは時計を渡しバスに乗り、父親の住所にたどり着く。ところが、一字違いの別人で、会うことができない。二人の間で大ゲンカが起こり、ジョズエは逃げ出し、ドーラは後を追う。疲労と空腹でドーラは気を失うが、戻って来たジョズエは看病する。この時から、お互いを必要とする愛と信頼が生まれる。祭で賑合う町で、ジョズエが呼び込みをし、ドーラが代書屋をして少なからずのお金を得る。ジョズエはドーラのためにドレスを買ってあげる。二人は父親の住所にようやくたどり着き、ブラジルの大地に広がる小綺麗な新興住宅地に、家を探し当てた。父親は家を出ていたが、二人の成人した兄たちがいて、兄弟であることを知る。父親からの「帰ってくる」という手紙をドーラが読んであげた。ジョズエはがっかりし、気を落としてしまうが、父親が帰って来ると励ます。兄たちはジョズエに親切にしてくれる。

ドーラは兄たちにジョズエを託し、明け方そっと、ジョズエが買ってくれたドレスを着て、バスに乗って立ち去る。気づいたジョズエは後を追うが、バスは遠くを走っていた。二人は祭りの時、写した写真を見て、互いを懐かしむ。この時のドーラの顔が素晴らしい。目的を果たした満足感であろう。それ以上に、人を愛したことから生み出された喜びに満ちた「聖女」の顔であった。小井沼師は、ブラジルは「聖人」を作る土壤があると、この映画を評していた。倫理性を欠いていたドーラは一人ぼっちのジョズエと旅する中で愛を育み、愛を生きることによって「聖女」に変身したのである。心温まる映画であった。